

明治三十八年

日誌

青年會寄宿舍

明治三十八年 正月

一月一日 朝食午前七時半

一月二日 午後旅順陥落之公報アリ、正月早々実ニ御芽出度事なり。市民狂セルガ如リ悦ビ商業ハ俄ニ景気〇〇

〇〇〇〇〇舎生一同舎長ヨリ招待ヲ受ク、余興トシテハトランプ、カルタ、囲碁、雷空
気、水、陸等ヲナシテ愉快ニ遊ビ種々ノ御馳走ヲ頂キ午後十二時満腹シテ帰舎ス。

一月三日 新聞雑誌競売ノ結果左ノ如シ

読売新聞 金十二銭 鈴木君

北海タイムス 金貳拾六銭五厘 朝倉君

処世百法 金拾七銭 上野君

中学世界 金拾壹銭 鈴木君

夜ハ舎生一同歌留多、トランプヲ取りテ遊ビタリ

一月五日 旅順陥落祝捷会ヲ大通西五丁目ニ於テ開ク、夜ハ提灯行列アリ、甚タ賑ナリキ。

一月八日 今君午後五時半帰舎セラル。食事ハ明朝ヨリ。

一月九日 農学校、中学校ハ授業始マル。

門限ハ元ノ通りトナル。

一月十一日 清水君午後帰舎セラル

一月十二日 清水君午後退舎セラル

〇〇裏手ニ貯蔵シ置キタル石油壺箱去る十二日ヨリ本日午前六時ニ至ル迄ノ間ニ盗難ニ
罹リタルヲ以テ本日午後警察署ヘ其旨届置キタリ。当舎ニ取りテハ大々的影響ヲ被レリ。

一月十五日 持田君午後帰舎セラル。食事ハ夕食ヨリ。

一月二十三日 午後六時ヨリ委員会ヲ開ク。

一月二十八日 夕食ハカレー

午後六時半ヨリ本年始メテの月次会ヲ食堂ニ於テ開ク。弁士ハ左ノ如シ

田村与吉君

今 与太郎君

朝倉金彦君

高松正信君

演説終ルヤ茶菓ノ饗応アリ。次ニ石澤副舎長ヨリ舎費ヲ減スルノ不可ナル点ニ付種々例ヲアゲ説明サレタリ。又会計整理ノ結果不明ノ負債金四拾壹円五拾四錢七厘アルヲ発見シ之ガ善後策トシテ委員ニ計リ、且舎員一同ニ相談シテ遂左ノ如ク定メタリ。

三十七年十二月五日現在文学部、運動部雑収入貯金等ノ残金ヲ以テ其負債ノ一部ヲ償ヒ尚不足金ハ舎費ヨリ償ヒ負債全部ヲ償フ事ヲ得ルニ至レリ

右算用上誤リノ誤リノアルノハ会計委員故意ニ之レヲ行フニアラスシテ不知※※ノ間ニ出ツル結果ナル故宜シク本年一月ヨリ監査役ナルモノヲ副舎長ニ願ヒ検査ヲ受クル方致当ノ事ト思フ。次ニ余興トシテ歌留多、骨板等ヲ遊ビ午後十時半散会シタリ。

宮部舎長ニハ用事ノ為メ御出席ナカリキ、本日最モ尽カサレ壹月ノ月次会委員齊藤藏之助君、鈴木限三君、杉原行二君、瀬戸太一君ノ勞ヲ謝ス。

本日午後壹月分食費計算ノ結果左ノ如シ

一日平均 金十九錢五〔ハと傍書〕厘

一ヶ月一人前 金六円十二錢五厘

之レニ舎費并文学部、運動部会費ヲ加ヒ総計スレバ金七円参拾貳錢五厘

一月二十九日 午後一時ヨリ在舎一同雪戦ヲ催シ甚タ愉快ナリキ

一月三十日 午前八時、新聞雜誌競売ノ結果次ノ如シ

読売新聞	金貳拾壹錢	持田君
北海タイムス	金参拾錢五厘	朝倉君
大陽十六号	金十三錢五厘	羽生君
大陽 一号	金貳拾参錢	瀬戸君
中学世界一号	金拾六錢	高松正君

二月ヨリ萬朝報ヲトル事ニ相定メタリ。

二月二日 萬朝報競売ノ結果左ノ如シ

二月分萬朝報 金貳拾壹錢五厘 杉原君

二月十一日 紀元節ニ就キ各学校ノ拝賀式アリ。

当舎ニ於テハ晩食ニ豚飯ノ御馳走アリキ

二月廿日 午後六時ヨリ委員会開キタリ

二月廿一日 昨夜工藤藏之助君ノ御令妹死去セラレタルニ依テ在舎生一同ニ代リ委員ヨリ工藤君ニ御悔ミヲナシ且ツ院内ノ郷里モ同時ニ弔詞ヲ送リタリ。

二月廿二日 賄婦十日前仕事ニ従事中踵を負傷シ医師ノ治療ヲ受ケオルモ未タ全快ニ至ラス、甚タ氣ノ毒ノ事ナリ。

二月廿三日 夕食ハカレーノ馳走アリタリ、午後七時ヨリ月次会ヲ開ク。

田村君ノ開会ノ辞アリ、次ニ当日ノ弁士ハ次ノ如シ

村上君

True gentlemen ニ付 上野君
徳田君
修学旅行ノ大略 羽生君
職業ノ撰択ニ付 石沢副舎長
精神修養ニ付 宮部舎長

演説ハ午後九時半頃終リ次ニ茶菓ノ饗応アリキ

宮部舎長ヨリ寄宿舎ノ名称変更ノ件ニ付相談アリシモ別ニ善キ名称モ見当ラヌ故各自考テヨキ名ヲ見出シ様ニトテ決ラバ三月ノ月次会ノ時ニ廻シタリ。

衛生委員ヨリ火ノ用心ト洗顔場ノ啖ヲ流ス事ニ付注意アリタリ。

日露戦争実記ハ次回ヨリ取ヌ事ヲ否決セリ本日専ラ尽カサレシ委員ノ勞ヲ深ク謝ス

高松正信君

〃 進三君

田中元太郎君

田村与吉君

月次会委員ハ以上四氏ナリキ

二月二十六日 吉田君今夜ヨリ外泊セラル

二月二十七日 午後一時ヨリ二月分ノ食費ヲ計算シタル結果次ノ如シ

一日平均一人ニ付金貳拾貳錢壹厘四毛

食費一ヶ月一人前金六円貳拾錢

外ニ舎費金壹円

運動部文学部会費金貳拾錢ヲ加ヒ

二月分の実費一金七円四拾錢

二月二十八日 新聞雑誌入札ノ結果左ノ如シ

北海タイムス (三月分) 金參拾貳錢 瀬戸君

萬朝 (三月分) 金貳拾錢 畑君

読売 (三月分) 金貳拾四錢 羽生君

大陽二号 金拾七錢 斎藤君

三月十三日 石沢副舎長ニハ本日ヨリ十勝地方へ出張サレタリ。

中学校ノ学年試験ハ始レリ。

三月十五日 今君病氣ノ為メ午後四時何分カノ汽車ニテ帰省サレタリ。

三月廿三日 中学校学期試験終ル

瀬戸太一君帰省セラル。

三月廿四日 持田君帰省セラル

三月廿七日 農学校ノ第二学期試業〔験〕始マル。

春季休業中ハ門限ヲ毎日午後十時トス

三月廿八日 午後五時ヨリ月次会ヲ開ク

夕食ハ豚肉ト牛蒡ノ煮付、酢物、慈姑ノ煮付、吸物等ニシテ近頃稀ナル馳走ナリキ。

朝倉君ノ開会ノ辞アリ

本日ハ宮部舎長用事ノ為メ御出席ナカリキ石沢副舎長ニハ十勝地方へ出張中ニアリシカバ演説ヲナシテ角立ツ方ヨリハ寧口愉快ニ遊ヒ其会ヲ終ラントテ始マリ、錢廻ス。

其他食堂ノ敷板之折ル、位ノ遊ヒヲナシ菓子林檎ヲ食シ午後十一時半散会シタリ。

本日ノ月次会委員ハ次ノ如シ

徳田君

上野君

柳川君

朝倉君

右委員ノ勞ヲ深ク感謝ス

三月廿九日 高松正信君真駒内へ旅行セラル

三月卅日 羽生君俱知安方面へ旅行セラル

三月卅一日 石沢副舎長ハ長ク出張中ノ処、本日午後帰舎セラル。

去る廿九日語後三月分実費計算ノ結果左ノ如シ

総日数 五百七十一日

一日一人ニ付平均二十一錢二厘

一ヶ月一人前金六円四十八錢五厘

尚、舎費、文学部、運動部会費ヲ加算スルトキハ

総計 金七円六十八錢五厘

四月一日 羽生君午後十一時帰舎セラル

四月二日 当舎春季遠足ヲ催シ目的地ハ定山溪。

一泊ノ予定ニテ午前五時軽装ヲナシ白米其他食物ヲ風呂敷ニ包ミ肩ニ荷フテ出発セリ。

幸本日ハ好天気ナリシカバー行ハ如何ニ愉快ナリシナラン。

永ラク当舎ニ於テ傭置シ、当在舎員ノ決議ニヨリ三月三十一日限りニテ解傭セラル、同氏多年ノ勞ニ向ケ感謝ス。

今タヨリ前田氏ヲ新ニ学僕ニ傭ヒ入レリ

四月三日 定山溪行ノ一行ハ本日午後五時半帰舎セラル。

新聞入札ノ結果左ノ如シ

一、読売新聞 金拾七戦五厘 田中君

一、萬朝 金十五錢 畑君

一、北海タイムス 金拾七錢 朝倉君

四月四日 病氣ノ為メ外泊サレシ吉田君ニハ病氣全快ニ付帰舎セラル、食事ハ明朝ヨリ。

四月七日 三浦革君入舎セラル、秋田県人ナリ。

逢坂君、高松正信君、田村君、松尾君、鈴木君等明日本校の寄宿舍ニ移ラル、今迄同釜ノ飯ヲ食シ且当舎ノ為メ尽カサレシ功劳ニ対シ舎生一同慰勞旁々茶話会ヲ夕食後

食堂ニ於テ開キタリ、宮部先生ニハ御出席ナサル、都合ナリシモ御病氣ノ為メ御出席ナカリキ、午後十一時半散会シタリ。

去る五日厚田地方へ旅行サレタル松尾悌七郎君、田中元太郎君ニハ午後六時帰舎セラル。

去る五日田村与吉君ニハ帯広地方へ旅行セラル。

四月八日 札幌農学校第三学期授業本日ヨリ始マル。

札幌中学校、私立中学校ノ新学期始マル、

田村君午前帰舎セラル。

逢坂君、高松正信君、田村君、鈴木君、松尾君退舎セラル。

四月九日 朝食後委員ノ改選ヲナス、当選者左ノ如シ

賄委員	斎藤君
会計委員	上野君
衛生委員	畑 君
文芸部委員	田中君
運動部委員	朝倉君
	吉田君

本日室替アリキ

二号	羽生君
	高松君
三号	徳田君
	松原君
四号	畑 君
	吉田君
五号	朝倉君
	持田君
六号	今 君
	田中君
七号	柳川君
	瀬戸君
八号	上野君
	三浦君
九号	斎藤君
	村上君
拾貳号	前田君

持田君帰舎セラル

今君帰舎セラル、食事は明朝より（十日朝）

四月十日 札幌の天地も漸く春定まり、博物館境内の雪今や全く其姿を失し青葉は之れに替りぬ。

ローンテニスのボールの声いと勇ましく愉快なり。

四月十一日 羽生君苦小牧方面へ午前八時出立、旅行の途に就かる。

四月十六日 帰省中の瀬戸太一君午後帰舎せらる、明朝食事。

四月廿日

あゝ札幌の天は春を忘れたるか、落雪紛々として地再び白し、且北風さへ吹きあれし、また冬に返へりしか。

四月廿四日 村上君、此度札幌農学校農芸科に入学せらると、今日より通学せらるゝことゝはなれり

夕食後石沢副舎長の室に於て委員会を開く、運動部にてはテニスコートの事に付き、衛生部委員にてはニシの□□□ありし、此等の議決終り、此度新に園芸部を設けて此れに委員二人を選びて以て舎の周囲花壇の整理家畜に関して其他園芸についての事務を掌らしむることゝとす。

四月廿九日 会計報告出づ

四月分一人分金六円四拾貳銭

一人一日分貳拾貳銭三厘

運動部及び学芸部貳拾五銭

一人分 七円六拾七銭

本日午後六時より月次会を開かる、就て、夕食にはライスカレーの馳走ありて腹鼓打ちつゝ七時となつて月次会を始む。

先づ畑君の開会の辞ありて次で柳川君、Iran will との題の下にウィリアム・ペンの事蹟につきて述へられ、朝倉君次で壇上に立ちて、欧米国の戦争上の経済と教育上の経済につきて話され、次に石沢君慈母かつきとの深恩をいはれ、大いに教訓とされるゝところありき、話終りて茶話会に移り、園芸部委員を選挙す。徳田君、村上君当選す。権助騒きに時を移して十一時過ぎ散会せり。本会の委員は、畑、今、三浦、持田の四君とそ、宮部舎長殿には何か御用のあられしならむ、御出席なかりき。

杉原君の退舎。

四月卅日 羽生君本日夕刻旅行先きより帰舎せらりき。

杉原君昨日夕食後退舎せらりき。

白井七郎君本日夜ニ入りてより入舎せられき、予修科一年にして福島県の人なり。

本日夕食後競売の結果

読売新聞	金拾七銭	斉藤君
萬朝報	金拾六銭	持田君
北海タイムス	金廿五銭五厘	朝倉君
太陽	金九銭	上野君

五月五日 節句の佳節に際して夕食に御馳走ありき。

五月七日 日曜日の殊に朝よりの好天気、今日を限りに北風烈しきも全く治りて舎生の有志の四五諸君には錢箱の地方に遠走せられ、且遠友夜学校の遠走（錢箱）ありて柳川君之れに行かる。其他の諸君にも各々二人三人打ち連れて郊外に散策し、或は運動場にテニスし、また農学校テニス会に出らるゝありて各々すべて春天霞たなびける陽和なる日を送られき。

五月九日 畑君は本日夕食後退舎せられて北四条西3丁目中村屋に下宿さるゝことゝなれり。

今日石沢副舎長には登別に出張せられたり。

五月十一日 石沢副舎長には出張中なりし登別より本日帰舎せられたり。

五月十三日 本日は農学校の運動会なりしが幸ひの好天気にて朝倉君は予修科の選手として去年に引き続き優勝の栄を得られたり〔欄外に「農学校運動会」〕

三浦君には病気のために暫時外泊せらるゝことになりき

五月〇〇日 委員会を開く。左の決議をなす。

月次会を来る二十七日の土曜日に開く事。

衛生委員の補欠選挙を月次会の折になす事。

其他運動部園芸部のことの相談ありき。

五月二十五日 農学校予修科二年本日より一泊にて幾春別に修学旅行せられき。

〇〇〇〇〇

夕食には豚飯の馳走に腹を□〔満〕し午後七時より月次会を開く、宮部舎長の御来会ありき。

白井君理想につき、朝倉君昨今両日間修学旅行談、石沢君のたんぼゝについて感情を宮部舎長はたんぼゝについて学理上より、皆其々の意見を述べらる。

白井君を衛生委員として選挙せり、演説を終りて茶話会に入り和気満つるの間十一時半とふに閉会、昨日出発せられし予修二年の諸君午後四時帰舎せられき。

五月二十九日 去る廿七八日の両日間に於て我海軍は対馬沖にて彼の久しき間我國民の待ちたりしバルチック艦隊を殆ど全滅、提督ロジェスウェンスキー中将以下二千余の捕虜を得、軍艦の沈撃せしもの廿艘に近く戦闘艦の捕獲せしもの二艘其他敵の損害は非常なりとの快報に接し、帝國民の心情躍起せることみすぎるなり。

五月卅一日 海戦勝利の詳報頻々として至り札幌区民の景気も極度に達せる物なり。

六月一日 札幌神社の臨時大祭にて当区各学校は円山の神社に参拝せり、なほ本日は、海戦の祝捷会を円山に催され帝国万歳の声は引きも切らず、天にひびきけり。

昼は中学校小学校の旗行列に、夜は農学校の灯提行列其他銀行会社の行列などありてすべて祝意を表し我軍人の偉功に対し感謝の情を示せるものならん。

六月二日 農学校は昨夜の行列ありしたため本日授業休み

本日新聞の競売あり

中学世界三冊	拾四錢	今君
太陽 2 冊	拾八錢五厘	羽生君
読売新聞	拾六錢	白井君
北海タイムス	二十九錢	朝倉君
萬朝報	拾九錢五厘	持田君

卅日會計決算報告出ず

五月分一人分の食費六円拾四錢

一日分の食費拾九錢八厘

舎費並に運動部文学部費壹円廿五錢

×一人分費用金七円三拾九錢

五月中は人数割に少なく多く費用あるべしと予想せしに案外少なき費用なりしは委員様の御尽力を深く謝するとすへ〔き〕なり。

六月十一日 中学生瀬戸、高松、持田の三君去る八日修学旅行に出発、四日間の予定、本日午後帰舎、食事は明朝。

六月十五日 委員会を午後七時より開く。左の事を議決す。

暑中休暇中に於て当舎委員の事につき、休暇中の文学部運動部の会費の事

休暇中在舎する人々の食費の増加は舎費を以て補ふこと。

其他此度の月次会を以て決することあり

本月月次会は農学校生の試験終了後、日を選でなす事。

六月十五日 札幌神社の祭礼、諸学校休業せり。

六月十八日 本日は羽生君の卒業せられて退舎せらるゝにのぞみ記念として舎生一同前庭に於て写真撮影す。

宮部舎長閣下も御来臨ありき。

本月初めより洗面場か新説につき数日の大工を雇ひしが十日過ぎ出来上る。

六月廿日 石沢副舎長は本日出立、向ふ二ヶ月ばかり本道西南部の方面検査の出張せられたり、

六月廿三日 農学校の試験開始予修科二年は廿八日、一年は廿七に終了すべし。

六月廿五日 先日某牝鶏を買ひあひるの卵を抱かしめしが、今日に□り、9匹の小鳥出でたり。

六月廿八日 農学校は各科とも試験終了し、暑中休暇始まりぬれど連日の降雨に気温頗る下りてなほ春の初め時候なり。

連日連雨に外に運動は出来ずラケット持ちて憤怒の眼に天をにらむも青空は何時表らるゝか、何所にあるか知るべからず。

六月廿九日 白井君は本日午後の汽車にて帰省の途に就かる。

旅行中の石沢君より手紙来るに其文に曰く「六月廿五日カルゝス温泉にて昨日幌別発、途上の調査をなしつゝ三里半にて当地に着、一泊して只今山越し登別温泉を経て再び幌

別に至り、室蘭に寄りそれより噴火湾を周り洞爺湖を廻りて俱知安に出で申す積りに御座候」尚其他にあひる孵化することに於て箱根より来る蜜蜂などにつきての注意を教へくる。

左の郵便来るに石沢副舎長様には其日の午後六時の汽車にて突然帰舎せられ、此れ雨天のため事業の果か取らざるためなり。

〇〇〇中にまた出立せらるゝよし。

〇〇〇

白井君昨日小樽まで行かにしに其先は汽車水害のため不通となり已むなく引き返られて昨夜十一時頃再び帰舎。

此日午後一時の汽車にて室蘭の方に出立、室蘭より乗船せらるゝ筈。

午後六時より本月月次会並に羽生君の送別会を開く。

晚餐にはライスカレー羽生君の送別会に前在舎して今本校にある諸君も来り晚餐を共にせり。

七時半頃開会せり、宮部舎長、石沢副舎長の来席、徳田、上野、朝倉、田村諸君の送別の辞及び石沢副舎長送別の辞として訓話を与へられ、次で羽生君の答辞ありて茶話会に移る。名指しに背なかをはれる程になぐらる。

七月一日 羽入君本日退舎せられたり。石沢副舎長は出立せられたり。

七月二日 本日朝来晴れ渡りて日中の暑は八十度に上り北海道も盛夏に迫る。

午後聖光寺ニ於て釈元恭師の演舌ありたり。

七月三日 農学校の成績発表せられたり、幸に当寄宿舎生は挙て進級の栄を得たり。

先日撮影せし写真は全く出来上り去年よりも上出来、されどなほ充分よく行きしといふを得ず、此の好男士を。

新聞雑誌競売結果

太陽 金八錢 持田君

中学世界 金拾錢 朝倉君

萬朝報 金拾貳錢 上野君

北海タイムス二ヶ月分 貳拾壹錢五厘 朝倉君

七月四日 石沢君より一昨日無事到着して天気的良好なるため愉快の旅行をなすとの報紋蠶より来る。

吉田君午後四時半の汽車にて帰省の途に就かる。途中日光の近辺近辺にて数日の旅行を試るとのよし。

四月一日より読売新聞を止めたり。これ帰郷せらる人多くして残るもの少なくなりしため。

先日孵化せしあひる九羽の中二羽イタチに捕はれて其影を失ふ。惜しいことをしたが後のまつり、以後は一層の注意を加ふ。

七月五日 午後九時半より札幌農学校の卒業式ありたり。当舎に於ては、柳川、上野、徳

田、朝倉、齊藤の五君予修科を卒業し、本科に入られたり。

朝倉君午後四時四十二分の汽車にて帰省の途に就かる。

七月六日 上野君は本日午後一時の汽車にて岩見〔沢〕村大学御茶之水へ出立せられたり

七月七日 白井君安着の報至る

七月八日 齊藤君本日午前六時の小樽行の汽車にて出発、帰省の途に就かる。羽生君も同列車にて札幌を去らる。

七月九日 あひる第二のもの孵化して五匹のあひるを得たり。

されど昨日は老ひたるあひる犬のためにかまれ生命は至抵〔到底〕覚束なし、よりにて此れを食はんとはす。

七月十二日 第二十八聯隊の方札幌に久しく宿泊せしもの九百〇六人の兵隊、午前七時当停車場より出発、舎生一同之れを送れり。

七月十七日 中学校の試験開始せられたり。齊藤君より無事着状来。

七月廿一日 小樽港に第三艦隊と運送船廿艘付加わり入港中と、中学校生徒諸氏は学校教員に導れて之が出帆するを錢箱の海岸に見られたり。

七月廿五日 中学校の試験本日を以て終了し高松君には早々本日午後四時の汽車にて出発、佐世保なる故郷に帰らる。

瀬戸君も本日午後一時の汽車にて帰省せられたり。

七月廿六日 持田君本日午前十一時の汽車にて帰省せられたり。

本日、柳川、田中君は厚別川の滝に遠足せり。

七月廿七日 今君本日午後三時に帰省の途に就かる。

最早中学生も凡て帰省せられ目下寄宿は僅か舎生四人の占むるところとなり、食堂に於て最も寂莫を感ず。

七月三十一日 学僕前田を来月中舎生の数減少するを以てその間暇を遣すことに一決して本日を限りに一先づ舎を出でしめたり。

前田は宮部先生宅に其の間入れられたり。

八月三日 村上君本日午後帰省せられたり。

八月五日 田中君本日午前六時出立、旅行の途に就く。

八月十一日 村上君本日帰舎せられたり。

八月十六日 白井君帰舎せられたり

八月十八日 石沢副舎長閣下旅行より本日帰舎せられたり。

入院中なりし逢坂君は此度退院して一先づ当寄宿舎へ入られたり。食事明日。

中村正寿君入舎せられたり、予修科一年にして山梨県の人なり。

八月十九日 田中君帰舎す。食事明朝より。

八月廿五日 今日より田中、保証人方に外泊せり。

八月廿七日 持田君帰舎せられたり、同時に御令弟も伴れたり。

八月廿九日 逢坂君、本日余市浜濱に向ひ出立せられたり。

八月卅一日 来社せし持田君令弟帰られたり。

九月三日 白井、田中の二君は支笏湖方面に数日の旅行試みらる。

九月六日 今、瀬戸の二君帰舎せられたり。

田中は引き続き保証人方に外泊せり。

九月〇日 大坂君入舎せられたり、此度予修科に新しく入学せられ熊本県の人なり。

九月九日 学僕前田舎に帰る。

九月十日 吉田君帰舎せり、食事せず。

九月十一日 農学校始業式ありたり。

齊藤、朝倉の二君夕刻帰舎せられたり、明日より食事。

吉田君本日退舎せり、本日食事せず。

田中外泊中なりしが、今日寄宿せり。

九月十二日 今朝、荒谷、河尻の二君入塾せられたり。共に林学科に今度入学せられしなり、秋田の人。

石沢君岩見沢方面に出張せられたり。

高松君帰舎せり。

九月〇〇日 〇〇君帰舎せらる。

今晚は十五夜の月、九時過くる頃テーブルを博物館内に運び月見宴を開く、枝豆にとうもろこしが御馳走。

九月十四日 上野君帰舎せられたり。

九月十五日 大工を雇ひ数日間舎の周囲修繕を施さしむ。

各室の壁の下方に壁土の落つるを防ぐため板を張りつめたり、すでに畳も修繕を終れり。

各室の障子をすべてはり替へたり。

書物閲覧室には一面紙を張られたり。

春植えられしトメト今紅に熟して閲覧室に其の秀絶なる珍味をたのしむ。二度ならず三度ならず乞ふ来年は一層トマトー栽樹に務めんことを、本年トメトーにつきては園芸委員君のご尽力に感謝す。

テニスのラケットもニューになって天高く澄み渡れる此頃プレイ、ノーカウントほど球の〇〇〇かせるも気持よし。

九月〇〇五日 午後五時より委員会を開き来る土曜日月次会並に新入舎生諸君の歓迎会を開くこととする事。

其他衛生、運動などにつき二三決議するところありき。

九月〇〇〇日 晚餐にはライスカレイの御馳走あり、午後七時より本月月次会及び新入舎生六君の歓迎会を開く。朝倉君先づ歓迎の辞を述べられ、次で中村君の謝辞、次で白井、柳川、田中の諸君の所感演舌ありて終りに副舎長石沢君歓迎の辞として有益な演舌資格サンフラハー（ひまわり）及びコスモスの花に就て述べられたり。話了へて茶話会に移り、林檎トマトー或菓子には席上は山な〇り、此の月次会に舎長宮部先生は御用ありと

ために御来席を仰ぎ得ざりしも其夜石沢副舎長の下までお手紙を下され、且多大のご寄附下され常に先生の御厚意に対して舎生一同感謝に堪へざるところなり、石沢君も此会にご寄附下されたり。

委員の改選をなす。

衛生委員	齊藤君
会計委員	柳川君
賄委員	上野君
文芸部委員	白井君
運動部	朝倉君
	高松君
園芸部	徳田君
	村上君

今夜室割りを定められたり。

此夜近藤俊治郎君入舎せられたり。工学科の人、長野県の人なり。明日より食事。

十月一日 江川金吾君入舎せられたり、中学生にして渡島の人なり。

本日室替せり。

第一号上野君	第二号白井君	第三号齊藤君
高松君	持田君	今君
第四号中村君	第五号柳川君	第六号大坂君
瀬戸君	川尻君	田中君
第八号徳田君	第十号朝倉君	第十一号村上君
荒谷君	江川君	近藤君

前日昨日を以て解雇し、之れに替りて小林俊一とて水産学校の生徒を学僕に入る。

九月分会計決算左の通り

一日分食費金貳拾壹錢九厘九毛

一人一月分食費金六円五拾九錢

文学部運動部及び舎費金壹円貳拾五錢

合計一人分七円八拾四錢也。

今月の会計は副舎長石沢君親しく任に当られたり。

持田君小林と改姓せられし旨披露さる・

十月二日 新たに任ぜられたる文芸部委員として白井、事務今日より引きつぐ。

旅行中の瀬戸君帰舎

十月三日 新聞雑誌競売の結果左の如し

萬朝報（十月分）拾四錢五リ 上野君

読売（〃）拾八錢五リ 白井

北海タイムス（〃）參拾壹錢 瀬戸君

中学世界第六号 七銭 小林君
" 第九号 七銭 田中君
" 第十号 八銭五リ 瀬戸君
太陽二冊 拾四銭五リ 田中君
太陽一冊 八銭 江川君

十月五日 朝霜白く牧草におきて木の間洩れ来る日紫なり、朝の気凛としてを襲ふの時テ
ニスコートに落葉ころがり秋天高く舎中の諸豪すべて健啖。

十月六日 昨夜を一夜、田中君外泊。

十月七日 舎の秋季遠足に就きて相談会を開く。衆議しばらく紛々として帰する処あらざ
りしが遂に明日出発、手稲山に遊び即日帰舎する事と決す。

十月〇日 (日曜)

総勢十〇人星を戴いて琴似街道をヤンヤと押し寄せて目指す手稲の山麓に至れば紅葉黄
山秋日和にまばゆきまで美しく、掬すべき泉あり。聴くべき葡萄の陰の清流あり、浩然
の気吾人の胸に入りて金石の響をなすべし。水涸れて敷く谷の落葉ガサ※※と登り、断
巖にかゝれる丸太一本をわたる時、汗にまみれし身は涼を入るゝに足る。

十一時頃絶頂に立ちて眺望を恣にす、青海波はなく、石狩の原野を流るゝ銀蛇壮、羊蹄
山、五剣山の一部蔽ふに雲なく、谷の色は紅にあらざれば黄、而してこれトバ松の青を
点ず。内地渋紙的秋色とは同日の比にあらざれば、風はなし、空は高し、横はって華胥に遊
ぶもよく、絶壁に立ちて大石を落とし、千万尺奈落の底まてころがるを聴くも凄仕也。
午後一時半帰途に就き路々コゝア、葡萄など採る、一道の夕日を浴びて山は愈々美なり、
別るゝに惜しく、足は軽し、夕月淡く浮かび出で、山中異様の響あり、力ある歌謡ひて
帰舎せしは七時頃。

この愉快極みなき行に加はゝるを得ざりし副舎長及び上野君、近藤君、今君等に又、別
離の快樂ありしを望む (旧在舎の鈴木限、松尾の二君この行に加る)

(此の日宮部舎長各室を監検し給へし由)

十月十日 警察署より戸籍調べに来る。舎生の族籍左の如し

北海道士族 大沢君

平民 今君、村上君、瀬戸君、江川君

秋田県士族 川尻君、学僕

平民 斉藤君、新谷君

和歌山県士族朝倉君 熊本県士族大坂君 静岡県平小林君 山梨県平中村君 長野県平
近藤君 福島県平白井君 滋賀県平田中君 鳥取県平徳田君 香川県平柳川君

十月十五日 庭球大会を開くの議、久しき以前より唱へられしが今夕相会して明後十七日
(祭日) 挙行に決す。但し都合によりては来る日曜に延期すべし。

十月〇〇日 〇〇庭球大会を催す。夕豚飯の馳走あり。

十月廿四日 農学校の遠足にて舎生軽川まで行く。

十月廿五日

委員会を開く、来るべき月次会に就いて議し且つ各部委員より種々提議する処あり。

斯して我等の寄宿舍は円満に発足して理想的ならんとす。快哉。

十月廿〇日 午後七時月次会を朝倉司会の下に開く、演説あり。

第一席 瀬戸太一

第二席 江川金吾

第三席 荒谷正二

第四席 大坂正一

第五席 川尻 仁

引き続き石沢副舎長立って松の吾人に与ふる教訓につき述べられ、次に宮部舎長は品性の修養に就て多く吾等に教へ給ひぬ。

静寂の暗を破って余興の楽しき声は堂にあふれ十一時会を閉づ。

今度も亦舎長及副舎長より金円若干の寄附あり。

十月卅一日 朝倉当分の内外泊することゝなる。

雑誌新聞競売の結果左の如し

読売拾七銭柳川 万朝拾参銭上野 タイムス弍拾五銭江川 中学世界十二号拾参銭小林

十一月二日 上川工業品評会に審査委員として石沢副舎長出張せらる。

十一月七日 石沢副舎長帰舎

十一月八日 当寄宿舍に於いて綿羊飼育の爲め、之れを購入〇〇〇石沢副舎長青森へ行く。

十一月十六日 石沢副舎長帰舎す、まだ出来上らぬ緬羊舎の中には愛らしきもの十二頭あり、この無邪気なる友遠方より来る亦楽しからずや。

十一月十七日 日向温き小春の一日、羊つれて博物館に歌誦する快は今日より始まりぬ。

十一月十八日 昼食後相集まりて記念祭に就き相談す。期日は廿五日と決定し、余興委員を互選し、其他各部分担の委員と常務委員会に於て定む。

舎内の有志相集まりて英文学の研究会を開かんの檄を見て今夕の相談会に参づるもの無慮何名、いづれ弥次るが目的とみて、飛んでもない事事ばかり喋舌りいつ果つべきとも見えざりしかば一先づこの相談会を解散せられたり、而して更に四五の人によって真面目なる会は生まれ出でぬ。

十一月廿五日 第7回記念会

門には国旗が一本、うすら寒い風にひらめいてゐるが、中はそれ※※準備に忙しい。五時頃からポツ※※来賓も見え、二号室、三号室との控室が段々賑って来る。ストーブの薪も精選といふ処で気持よく燃え、ふざけた話が盛んに聞える。

チト遅れて六時半頃食堂が開かれた、壁が白紙で張られ数十枚の絵画が殊更美しい、紀念と題された額が懸つてゐる。宮部先生及夫人を真中に卅余名がヅラリと並んで先づ御馳走を横目で見ると綺麗々々。まるで本職の会席料理のやう、よくも男の手にかうも出

来たものだと来賓側から御ほめ詞が出る。流石は婦人、宮部先生の奥さんの観察は特別だ。一々品物を見て御感に入って居られた。是れで十分食事委員の労を謝すに余ある。食後少時来賓は思々に談笑せられた。末光君は食ひ過ぎて屁が出さうだ、などと云って居た。八時半万国旗紅燈にあざやかなるの下、記念会の式は行はれた。

司会者石沢君は、開会の辞を述べて、更らにこの日を記念せよと来賓に告げて壇を下る。次に文学部会計部等より報告あって、第四席新入舎生総代近藤俊次郎の演説、第五席藤井君の来賓総代として謝辞を述べ、第六席吉田守一君懐旧の念に駆られて演壇に立ち楽しき在舎中の事を述べる。第七席愈々吾人の父なる宮部先生の御話である。創立の事から禁酒禁煙の経験を述べられ又大なる教訓を垂れ給ふた。以上これで式は閉じられてサーこれからが余興だ。

時はもう十時、愚図々々せずにと第一番に打ち出したのは大食王戴冠式という飛んでもないもの、美妙的なハーモニカにつれて数名のナイトが両側にづらりと並び受冠の王と法王よろしき所に立つ、果然拍手は起ってワイ※※と云ふ騒ぎ、滑稽な祝辞が読み終って法王が井の冠を捧げて厳格な上調で異様の祇をし、将に冠を授けんとするや、拍手、喝采急霰のやうであった。次が剣舞、裁判、通弁、異装行列等で来賓の方からは吉田君が独吟、高松君のハーモニカ等で十一時に愉快なる会を閉じた。

この日の来賓は

宮部先生、同夫人

池田君〔墨線で削除〕、松井君、竹田君、藤井君、末光君、高松君、吉田君、吉川君、田村君、杉尾君、鈴木（限）君

不参者

池田君、田中君、橋本君、安倍君

余興委員 上野君、高松君、今君、大坂君、江川君、白井

食事委員 柳川君、朝倉君、斉藤君、村上君、田中君、中村君

会場委員 石沢君、川尻君、近藤君、小林君

接待委員 高松君、瀬戸君

庶務係 石沢君、徳田君、新谷君、学僕

ご馳走は、

飯

一、茶碗むし（内家鴨、くわい、きくらげ、かまぼこ、ぎんなん）

二、口取（鮭のグレー、かまぼこ、大福豆のきんとん、蜜柑、青菜）

三、薩摩芋の苔巻〔海苔巻〕、いかめし、キャベージのソース巻

四、酔の物（ほっき貝、じゅんさい）

五、寄宿煮（あじ付）＝家鴨、牛蒡、子芋、くわい、人参

附記 廿八日に会計の決算があった。今月各自の負担は非常に大である、といふのは重に記念会の御馳走が贅沢過ぎたのに基いて居る。吾々とても金さへ出せば西洋料理なり

酒飲みの御好み料理なり何でも出来ぬことがない、がしかし、吾々は常に狭い範囲の生産的経済の上に立たねばならぬのだ。今度の記念会には会計委員の予算を顧みずに余りに贅沢を尽くして各自の負担を重からしめたのは会計委員始め甚だ迷惑に感ずる処、後のために敢てこの言を書いておく。

十一月廿八日 瀬戸太一病氣ノ為メ当分外泊

十二月一日 新聞競売ス

タイムス七銭五リ (江川君)、萬朝九銭 (上野君、読売十二銭 (田中君)

十二月十八日 中学世界競売ノ結果

十三号 上野君 五銭

十四号 田中君 五銭五リ

十五号 白井 八銭五リ

十二月十九日 中学校の試験今日で終り。江川は凱旋した輜重輸卒の様なスタイルで帰省した。

十二月廿日 今、持田 (小林) 乳のみに帰る農学校の試験今日で終る。

十二月廿一日 門限十時となる。

十二月廿六日 上野亮太山へ引っこむ。

十二月二十九日 舎内大掃除

十二月卅日 明治卅八年最終の月次会を開く。今月は帰省する人もあって人数も極く僅かなのでいつもの様に食堂でやるのも面白くないから四号室で開いた。演説は徳田、斉藤、高松、村上等で皆歳暮に際して過去一年を顧みられ趣味多き所感を述べられた。

次に石沢君が如何に過去を懐ふべきか、如何にそのホープを持つべきかを説かれた。

やがて是れ楽天法ともいふべきである。最後に宮部先生に御話しを願った。先生は母のやうな愛を以て霊と肉の暗闘の事から我々の人格を円満ならしむべく淳々と説破された。先生の洒脱な結髪の御話しから転じてバリカンの西洋かみそりとを買ふ事となる。其の他会計上の事、文学部の事業の事等相談があつて十一時前に席を総立ち。

委員改選の結果左ノ通り

文学部	大坂正一
会計部	田中元治郎
食事部	徳田義信
衛生部	白井七郎

在舎生

副舎長	石澤 達夫
本一	斉藤蔵之助
本一	徳田 義信
本一	柳川 秀興

	予二	田中元治郎
	予一	中村 正寿
	予一	大坂 正一
	林一	川尻 仁
	林一	新谷 正二
	工一	近藤俊次郎
	農一	村上雄之助
	中四	高松 進三
	予二	白井 七郎
	学僕	小林 俊一
帰省中	本一	上野 亮太
〃	中四	今 興太郎
〃	中四	小林 安序
〃	中四	江川 金吾
外泊	本一	朝倉 金彦
外泊	中四	瀬戸 太一

十二月卅一日 吾々学生は晏として来らんとする三十九年を迎へんも諸々の在郷ハ或ハ借錢を催促せられ、或は糶つく事も不十分なる所あるべく、殊に東北地方大飢饉の地方の状況はた如何、察するに余りあるべし。

札幌の町も今年はさまで賑はないそーだ。

夕方午後五時前

林一	松本 純再君
〃	山本 栄君

入舎す。

愈五時の報あるや在舎生一同食堂につく。

所が所謂「トントリ」なるを以って学生として贅沢過ぎる位の御馳走也。健啖連ハ相も変らず盛んなもんだ。

晩の十時、石沢君より「カード」を与へられて翌日やるべき年賀状を書く。

其氏名次の如し

宮部 金吾

笠原 掬一

森 源蔵

茲に十一時過ぎ舎生一同やすけく寝に付く。其邯鄲の夢はた如何に

終